

高校生諸君へ

はじめに

このシリーズは高校生である孫のために日本の近代史を分かり易く説明することを目的に始めました。その動機は加藤陽子さんの『それでも、日本人は「戦争」をえらんだ』を理解するためには基礎知識 {日本史・B}を学ばねばならないと考えたからです。目標の基準を少し超えていますが今回からは「田中 恒著・アジア・太平洋戦争史」から多くの引用をさせて頂き工夫をこらして簡便に記す努力をしました。

今回は辛亥革命（1911年）から張作霖爆殺事件・蒋介石による中国統一（1928年）までを日本と中国の関係を中心に考察して第一次大戦で日本が獲得した領土を確認していきます。（9頁に地図を載せました）

それは日本の醜態をあぶり出す作業に他ならず、学校では教えにくく、割愛されているのが実情です。

然し、人類が築き又背負っている歴史は消すことは出来ません。どの時代、どの国の歴史も戦争ばかりです。学べば学ぶほど嫌になります。逃げ出したくなります。じっと我慢して自分は何のためにこれをしているのかを自問します。答えは「人類の罪の深さ」です。どの国も、どの時代も「罪の深さ」からは解放されません。嫌と言うほど学ばなければ、戦争の愚かさには気がつかないのが人間です。一人でも多くの人が戦争の愚かさについて「悔い改める」道を歩んで欲しいと願い学びを続けています。

1910年日韓併合を果たした日本は清国にも同じような支配を拡げ「満鮮一体化」という野望に向かって進みます。中国での辛亥革命に対する日本の政策は一貫して反革命の立場で中国を押さえ込んでいきます。その過程で中国における反日排日感情は増幅し、日本は国際社会の流れに逆らった道を歩み始めます。

1, 辛亥革命とは

辛亥革命は①中国（当時は帝政の清朝）が帝政から共和制に代わろうとする革命の側面と②それを阻止する大日本帝国の一連の干渉過程の二つの側面が相互に絡みながら進んでいく革命の歴史です（広義の定義）、年代は1911年から1928年迄、革命のリーダーは孫文とその後継者の蒋介石で、革命の理念は孫文の三民主義と五権憲法です。

(1)「扶清滅洋」から「滅満興漢」へ

1900年の義和団の乱の目的は「扶清滅洋」でした。中国はアヘン戦争（1840年）から日露戦争まで西洋列強と日本から痛めつけられ半植民地化されていく自国を護るためには外国の勢力を排除し清国を強くすることを目的としていました。然し、清国の政治は官僚や軍閥の収賄や売職（官僚の地位を売買）が激しくなり、政界の腐敗により国の財政は逼迫します。そのために、重税が課され貧富の格差も拡大の一途をたどり国も人心も荒廃していきます。

そこで学生や一部の知識人は、腐敗しきった清朝政府には外国の攻勢に抵抗する力も国を豊かにする力もないことに気づき、先ず清朝政府を倒して、新しい政府を造ろうと考え始めます。

多民族国家である中国は満州族である清朝が1636年から支配を始め、多数民族である漢民族を抑えていました。漢民族のエリート達は清朝を打倒して漢民族による新しい国家を興すしかないと考え「滅満興漢」をスローガンにして立ち上がりました。その指導者が孫文です。孫文が革命で目指す政府は三民主義による共和制です。（この所をしっかりと理解しておかなければ話が混乱します）

(2)狭義の「辛亥革命」1911年10月10日

孫文の活動は1894年日清戦争の最中から始まります。革命運動資金を調達するために医者进行を辞めホノルルに「興中会」という秘密結社を組織し、1895年（29歳）に最初の革命を計画しますが、裏切り者が出て事前に発覚し孫文は日本に亡命します。1900年の北清事変の時も好期再来として、惠州で革命を起こしますが密告者によって失敗します。（惠州事件）

1905年迄外遊して三民主義の思想を固め、戻ってきたのは本国ではなく横浜でした。日本は満州経営に乗り出したところです。

日本で宋教仁ら同士と辛亥革命の中核となる「中国同盟会」を組織します。

「中国同盟会」が結成されると革命運動は活発化しますが1911年の辛亥革命まで十数回の失敗を重ねます。（私見――清朝の強さと国民の嘆きが伝わります）

1908年清朝の光武帝と西太后が相次いで死去します。光武帝の甥、溥儀（3歳）が即位し宣統帝となりその父が摂政を始め軍機大臣であった袁世凱を追放します。

財政難を乗り切るために米、英、仏、独から借款をするために担保が必要になり、強引な「清国鉄道国有令」を出して民間鉄道の国有化を強行します。これに対し四川省の民衆は猛烈に反対し暴動を起こします。

これを鎮圧するために湖北省が援軍を送りました。湖北省の警備が手薄になった1911年10月10日、湖北省の武昌で宋教仁が革命を起こし、12月2日南京城を占領し、南京に臨時政府を成立させます。この時、蒋介石は兵士として参加しています（孫文と蒋介石が初めて会ったのは1910年6月場所は東京です。その後蒋介石は三民主義を尊び孫文に仕えます）

(3)清朝の滅亡

10月10日の反乱騒動が全国に波及すると清朝政府は狼狽し、追放した袁世凱を呼び戻します。この袁世凱は北洋軍閥の総帥でその配下には多数の将軍がいました。中でも有名なのが「段祺瑞」「張作霖」です。

11月13日、袁世凱は勿体をつけて、堂々と北京（清朝政府）に乗り込んで、清朝の要請により袁世凱内閣を組閣します。袁世凱の目的は清朝は早晚倒れる、その後新しい政府で皇帝になろうという企みでした。袁世凱の抜群の軍力で革命軍（共和制を目指す）を倒すことは簡単にできたにもかかわらず、彼はあえてそれをせず革命軍に講和を勧告しました。その目的は革命軍を利用して清朝を倒すことでした。清朝政府は又、狼狽して袁世凱を再び追放しようとしませんが、彼は配下の段祺瑞に命令して北洋軍閥武将46名の連署で「共和制賛成」の電報を打たせ清朝を威嚇し講和交渉の全権を任せます。袁世凱は12月2日講和交渉の結果だとして、清朝に共和制を承認させ、宣統帝の溥儀を退位させます。270余年続いた清朝を滅ぼしたことで辛亥革命の一步は進みました。

1912年1月1日中華民国が南京で誕生し、孫文が臨時大總統に選ばれ共和制が始まりますが、その後ろには北洋軍閥の総帥、袁世凱がトップの座を狙っています。そこで孫文は共和制を守るとの約束で臨時大總統の地位を袁世凱に譲位します。孫文は袁世凱の独裁専横を予期してそれを防止するために「臨時約法」を制定して牽制をします。

(4)日本の動き

1912年は明治45年、大日本帝国の明治天皇が7月30日崩御されます。

この年に日露間で中国の辺境地方をそれぞれの特殊権益範囲に分割して争いをしないという秘密協約を締結します。これは1907年の日露協定の確認です。協定から協約になっています。中国の政権がかわっても日露の満州・蒙古地方の特殊権益は変わらないとするものです。これは秘密協約ですから中国政府は知りません。もちろん国際的にも認め

られていませんが地

図上では線引きが
なされて将来の支配
権を予約したよう
な野蛮な協約です。

この時期に日本が
中国に持っていた権
益は日露戦争の結
果ロシアから奪っ
た関東省と南満州
鉄道沿線の租借権と
その少し前の北清
事変の結果として北
京に公使館を護る
ための若干の警備
隊を駐留させる権利
だけでした。（こ
こもしっかり抑えたい
ところです）地図
参照



日本とロシアがかってに決めた境界線

〔満蒙とはどこか〕

満蒙とは、南満州と東部内蒙古を合わせた地域。遼寧～モンゴル人民

加藤陽子著「それでも日本は戦争を選んだ」 p268から引用

(5)袁世凱の専横政治と孫文

1913年2月、中国では「臨時約法」に基づき第一回選挙が行われ、宋教仁の活躍で国民党が大勝利を納め政党内閣を組閣しようとしたが、袁世凱はそれを嫌い、買収、脅迫、暗殺、監禁等あらゆる悪辣な手段を弄して国民党を切り崩し3月20日には宋教仁を暗殺します。

4月袁世凱は国会の審議を経ず、日、英、独、仏、露の5ヶ国と2500ポンドの借款契約をします。

この借款が明らかになると国民党急進派は袁世凱討伐軍を編成し反旗をひるがえしますが、軍力に圧倒的に勝る袁世凱は配下の段祺瑞を南下させこれを弾圧します。これを第二革命の失敗といいます。孫文は日本に亡命します。第二革命を制した袁世凱は10月6日選挙を行い第一次正式大總統に就任し、「中華民國」が独立国家として世界の13ヶ国から承認されました。

1914年5月、袁世凱は孫文に作られた「臨時約法」（共和制を目指す法律）を修正して「中華民國約法」として政権と兵権を一手に掌握し「大總統を皇帝にする」と宣言し、あと一步で皇帝になれるというところで第一次世界大戦が始まります。

7月孫文は汪兆銘らと東京で中華革命党を組織し袁世凱に追われた国民党議員や軍人を日本に亡命させ革命家の拠点を作り時を待っていました。

(6)第一次世界大戦と日本軍の参戦

①参戦の経緯

1914年6月第一次世界大戦が始まります。

戦場はヨーロッパですが日英同盟を結んでいた日本は三国干渉で蒙った被害者意識を持っており、ドイツが中国で持っている租借地や権益を取りたいと考えて、英国に「同盟の趣旨に基づき英国を援助したい。英国が参戦する時は、日本にも参戦を要請して欲しい」と2度に渡って申し入れをします。英国は日本が辛亥革命を利用して満蒙に特殊な地位と権益を拡張しようとしている意図を十分に理解し懸念し、日本の参戦に躊躇していましたがドイツが中国に持つ青島にはドイツ東洋艦隊があった為、8月7日日本海軍に「中国沿岸のドイツ武装商船隊の捜査撃墜」を要請します。これは沿岸に限るものであって中国上陸は阻止できると考えていましたが、日本側の加藤高明外相は「まず日英同盟の要請に応えること、次にこの好期を逃さず、中国におけるドイツの根拠地を一掃して、ますます国威を発揚すべきである」日英同盟の義務を果たすという口実で公然と英国の懸念したように中国内陸にも武力侵略を始めますが、それには次のような袁世凱との交換条件もありました。

袁世凱は日本の意図を素早くキャッチして日本側に次のような交換条件を出してきました。「中国の革命派が日本に亡命していることに不安を抱いている。日本が亡命者を追放してくれれば、日本軍が山東に上陸し、青島を攻略することを承認してもよい」つまり袁世凱は自分の保身のために孫文たちの「中華革命党」の取締まりを強化してくれと日本に依頼し、それと引き換えに日本の侵略に免罪符を与えることになりました。両者の利害は見事に一致したわけです。

②ドイツとの交戦

1914年8月15日日本は次のような最後通牒をドイツに送りました。

「日本及び支那海洋方面よりドイツ国艦艇を即時に退去すること。

ドイツ帝国政府は膠州湾租借地全部を**支那国に還付する**の目的を以て、1914年9月15日を限りに無償無条件にて日本帝国官憲に交付すること」

最後通牒への回答はなく8月23日から戦争状態になりました。

8月27日、日本軍は太平洋にあるドイツ領の南洋諸島のマーシャル、マリアナ、カロリン諸島を占領し、11月7日には青島を占領した。（9頁地図参照）

大戦は1919年迄続きますが日本とドイツの戦いはこの段階で終わります。

この戦闘の過程で日本軍は軍規を破って中国本土に侵入しました。

袁世凱は日本側の要求する広域な交戦区域を制限しましたが、日本側は無視し攻撃を拡大し、「一人でも日本軍の行動を邪魔したら、全村民を斬首する」との布告をし、民家に押し寄せ婦女に暴行を働く兵士もいました。又、勝手に軍票を発行し物資を取り上げ、公然と郵便物を開封するなど乱暴狼藉を働きました。ドイツとの戦闘に中国の民衆が駆使され袁世凱の抗議も日本軍には聞き入れられることはありませんでした。

大戦はヨーロッパではその後も3年間続きます。この大戦は英仏露の三国協商と独伊墺の三国同盟との戦争であって中国はこの時点では中立を宣言しており、中国と日本の戦争ではありませんでした。（日露戦争と同様に戦場が中国になる）

然し、青島を占領してからの日本はドイツの権益の範囲を超えて中国の主権を侵し膠州鉄道（膠州湾から東に伸び内陸へ向かう）と津浦鉄道（天津から下り南京に向かう）の交差する「済南」を占領して北京・南京へ迫る形勢を取りました。又山東省のドイツ権益を中国に還付せずに日本軍が引き続き占領することを強行する等の行為は中国民衆の激しい怒りとなりましたが、袁世凱も日本の横暴ぶりにはまったく歯が立ちませんでした。（見逃すことが裏取引できていたか？）

日本が参戦する前に袁世凱と約束した日本国内にいる孫文たち中国革命家を一掃する。その見返りは「かねてから日中間で懸案になっていた問題を一気に解決する」との言質を取ってましたので、懸案は日本側の一方的な「対華21ヶ条の要求」となって突き出されます。

(7)対華21ヶ条の要求

「対華21ヶ条の要求」は第5号21条からなるもので一方的且つ不平等な要求で、中国の主権を侵害したもので、その後に激しくなる「抗日排日運動の原点」になるものです。

1915年1月18日に袁世凱は直接渡され内容に衝撃を受け28日の本格交渉の前に情報を新聞社に流、欧米諸国にも知らしめます。欧米諸国は撤回を要求したが日本はそれに応じることはなく、欧米諸国は日本の「二枚舌」外交を激しく非難しました。交渉は3ヶ月25回に及び5項目21ヶ条は削られていき結局は次の2項目となります。

第1号、山東省に関する要求

主な内容、山東省内のドイツ権益を日本に譲渡する。膠州鉄道に接続する鉄道の敷設権を日本に譲渡する等**既成事実**を承認すること

第2号、南満州及び東部内蒙古に関する要求

主な内容、旅順大連租借期限並びに南満州及び安泰両鉄道に関する期限を更に99カ年とする。これはロシアから引き継いだ権益租借権が1923年で満了するのを延長する要求です。

5月9日、袁世凱は不平等な条約に調印しました。

21ヶ条条約が公表されると中国国内では激しい反日抗日運動が起き、民族主義が昂揚しました。削除された3項目は日本の侵略プログラムであり、韓国併合と同じように中国を併合して「満鮮一体化」を狙っていました。それは当然にして、孫文の三民主義に反するものであり、イギリスの中国における権益をも排除し、日本のみで中国の支配を狙ったものであった故に国際的にも激しく批判されました。中国はこの日を「5・19・国恥記念日」として記憶に留めています。

締結した袁世凱にも激しい攻撃が起き「打倒袁世凱」を旗印に武装蜂起が各地で起きました。

削除された3項目

第3号、漢冶ヒョウ公司に関する件（2ヶ条）

中国が誇る最大の鉄鋼コンビナートを合併にする。「鉄を半分よこせ」という意味

第4号、支那沿岸島嶼の不割譲に関する件（1ヶ条）

第5号、希望条項に関する件（7ヶ条）

中央政府に政治、財政、軍事顧問として有力な日本人を招聘すること。

支那内地における日本の病院、寺院、学校に対しては土地所有権を認めること

日本より一定の数量以上の兵器の供給を受けるか、又は日支合弁兵器廠を設立し、日本人技師を傭聘し兵器材料の供給を仰ぐこと。
中国の戦略上最も重要な「武漢三鎮」と言われる武昌、漢陽、漢口を通る鉄道の敷設権を要求等、
韓国併合のときの手法を全て盛り込んだ内容で中国における英国、ロシアの持つ権益をも脅かす内容となっています。米国が一貫して強く要求している中国の門戸開放と機会均等の実現を阻むものである。

「対華21ヶ条条約」の締結は日本国に取り返しのつかないほどの大きな損害を与えることになった。その一つは日本商品の不買運動が中国全土に拡がり貿易立国の日本の経済に大打撃となって跳ね返ってきた。
中国内では排日主戦論が台頭、英米とは対立する構図を作ってしまった。

(8)袁世凱の失脚と中国の混乱時代

1916年3月、袁世凱は帝政を宣言し自ら皇帝となりましたが、皇帝は世襲制で時代逆境であり、三民主義の否定であるとして、雲南省等で武装蜂起が起きました。
外国列強からも批判され、皇帝を取り消し元の大總統の地位にしがみついたところに孫文が戻ってき、袁世凱の腹心達も寝返り6月6日悶死したと言われています。

袁世凱が死亡してから1928年までは中国国内は軍閥割拠、軍閥対軍閥、国民党対軍閥、国民党対共産党、国民党内の抗争等の騒乱状態が続くなか、北京を中心とする北は袁世凱の子分であった段祺瑞が勢力を伸ばし、南では孫文が革命を志す広東軍事政府を組織し不統一な状態が続きます。

1917年、日本は満州への進出を狙い、北方軍閥の段祺瑞を支援します。寺内正毅首相の私設秘書である西原亀三の名前を用いて1億4500万円の借款を与えます。内容は満蒙の鉄道敷設となっていますが、実際は段祺瑞の私兵として南方革命軍（孫文、蒋介石）の制圧に当てられ日本側の要求する満州への権益には用いられず、踏み倒されます。（日本は一貫して北洋軍閥を利用しようとして多額の資金を支援します）

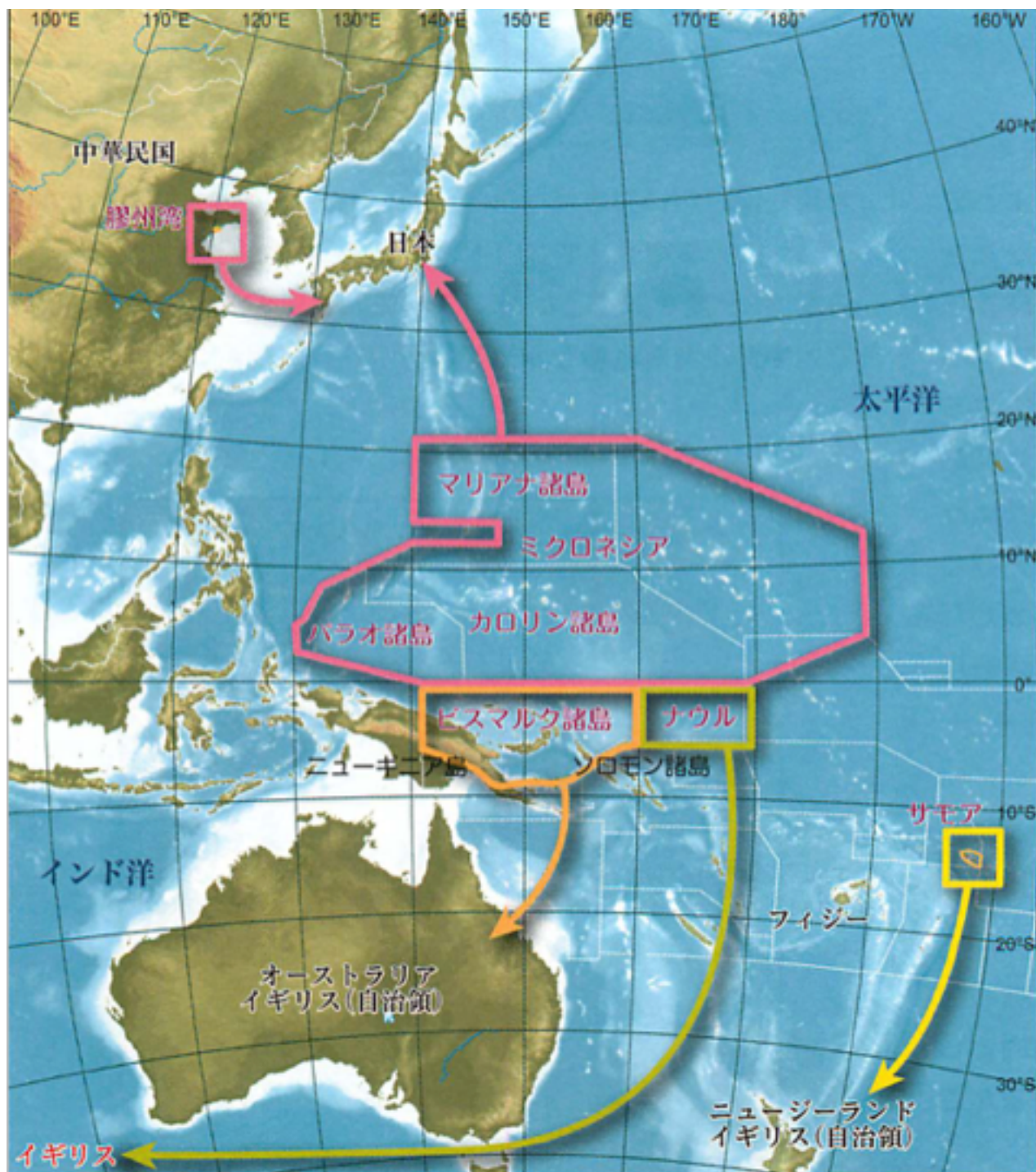
1917年9月10日孫文は広東に「広東軍事政府」を樹立し蒋介石を膝下におき、三民主義を掲げて3度に渡って北方の段祺瑞に挑戦しましたが、段祺瑞の資金力による買収工作で内部分裂が繰り返され又もや日本に亡命することになります。

この年はロシア革命、レーニンがソビエト政府組織を樹立します。

1918年には段祺瑞は東北三省に勢力を持つ張作霖を閣内に迎えて軍閥の力を強化します。

(9)パリ講和会議と「5・4」排日運動

1919年1月18日から6月28日迄第一次世界大戦の終戦処理のパリ講和会議が開かれました。パリ講和会議の主導権を握っていたアメリカのウイルソン大統領は戦後の世界秩序の原則は民族自決であると演説をし、植民地化されていた国々は鼓舞されました。中国代表は「21ヶ条条約」の破棄と山東省の権益の還付を要求しましたが、受け入れられませんでした。即ち①山東省のドイツの権益は日本に継承され



②ドイツ領南洋諸島が日本の委任統治になることが認められました。地図参照

地図から分かりにくいですがグアム島はアメリカ領で、赤線ないにはありません
①については開戦時には中国に還付するとなっていました。1917年、日本が英国の要請で地中海における兵員輸送を頼まれたときに、その見返りに山東省のドイツの権益は日本に渡すとの密約ができていました。よって「日英間では既に話しがついでおり」①は議題として取り上げられず日本に認められたのです。
中国は調印を拒否しましたが、国民は屈辱感にさいなまれ、激しい抗議活動が北京大学の学生たちを中核として勃発しました。この日を恨みをこめて排日運動「5・4 記念日」として記憶に留めています。

(10)ソ連が中国に近づく

このような状況の中でレーニンがお土産を持って孫文に近づいてきます。
お土産は「帝政時代の侵略行為によってロシアが取った領土、賠償金はいっさいこれを返却する」侵略行為を前政権にまで遡って責任をとるという内容です。コミンテルン活動（各国に共産党を組織し、それを指導して世界各地で革命を実現することを宣伝する使命をもつ）が始まっていました。この頃から共産主義の思想に共感するエリートが多くなる。毛沢東もマルクス主義に急接近する。

一方段祺瑞の力はパリ会議の失敗によって弱体化し、代わって張作霖が登場し北洋軍閥の力は維持された中国統一の厚い壁が立ちあがります。

この年日本は中国の関東省にある関東都督府の陸軍部を独立させ、天皇が直轄する「関東軍」に改めました。

1920年国際連盟が発足し日本は英、仏、伊の4国からなる常任理事国となります。米国は言い出したものの国内で人種差別をかかえており議会で加盟が否決され国際連盟に加盟していません。

1921年4月、孫文が第二次広東軍事政府を樹立します。このころから蒋介石の考えが変化し始めます。

7月中国共産党結成、第一回全国大会が開催される

(11)ワシントン会議で「山東協定」に調印

1921年11月12日からワシントン会議が開かれ軍備制限問題とパリ会議で未解決になっていたアジア・太平洋問題が話し合われました。中国は9ヶ国会議で「中国の領土保全」と条約関係国すべての国と商工業に対する機会均等を認め、門戸を開放すると発言し好感を得ました。これに応じてイギリスは威海衛租借地を還付する。

フランスは広州湾租借地を還付すると声明を発表、委員会は中国問題に関する国際的大憲章となる「ルート4原則」を可決しました。その内容は「列国の特権や権益の撤廃、治外法権の撤廃、中国鉄道差別待遇の廃止等々」中国の国際的地位の向上がなされた。日本と中国との山東問題は英米の仲介で直接交渉に移され1922年12月「山東協定」に調印し日本は山東の権益を還付しました。

ワシントン会議から「山東協定」締結まで1年を要していますが、日本の抵抗の強さと同時に調印を余儀なくされた国際環境の変化を伺うことができます。

この「山東協定」は9年後の満州事変の序奏となり、日本の復讐が始まるのです

(12)ソ連が更に中国に近づく・惑う蒋介石

1922年、孫文は武力統一を図るべく、蒋介石と共に北伐を進めようと計画を立てましたが部下の意見が一致せず挙行を断念しています。

1923年1月、孫文はソビエト連邦の代表として中国を訪問していたアドルフ・ヨッフエと上海で会談、ソ連は中国の統一と独立に対し同情と援助を送ること、帝政時代の中露条約の破棄を基礎として鉄道の管理などに関して中ソ交渉を開始する用意があること等を約束し、中国側はソビエト共産制度は適用できないが、ソ連と提携し「連ソ・容共に基づく中国国民党と中国共産党の国共合作を正式に発表した。この段階では蒋介石は孫文に従っていますが、孫文からソ連赤軍の視察を命じられ、ソ連を訪問してソ連の共産主義が孫文の三民主義と著しく異なっていることを学びソ連への不信感と中国共産党に対する警戒感を強くして帰国しましたが既に「国共合作」は進み中国共産党員が国民党の中央執行委員に加わったり、コミンテルン（各国に共産党を組織し、それを指導して世界各地で革命を実現することを宣伝する使命をもつ）の代表であるミハイル・ボロディンが国民党の最高顧問になっていましたので蒋介石は怒り故郷へ帰ってしまいました。その後孫文にたしなめられ中国国民党陸軍官学校の要職につき軍人教育に人生訓や処世訓を教える等で多くの優秀な部下軍人を輩出しその腕前を孫文に高く評価されます。然し、国民党は容共左派（汪兆銘）と反共右派（蒋介石）に分裂したまま中国共産党との国共合作で北伐を計画していきます。

(13)中国の「北伐」と日本の「山東出兵」

1925年3月12日孫文は北京で病没します。蒋介石は「三民主義による中国統一という孫文大元帥の遺志を達成するのが我々に課せられたる使命である」と訓示、国民党内部の抗争を調整しながら実権を掌握していきます。

1926年7月9日「今や北洋軍閥と帝国主義者が我々を包囲している、国民革命は精神を集中し、総理（孫文）の遺志を完成するときである」と演説して北伐宣言をします。ここでいう帝国主義者とは日本のことです。

北伐は順調に進み、地域住民の協力を得て山東省にまで迫っていましたが日本軍に妨害されます。

1927年5月、日本（田中義一内閣）は第一次山東出兵をします。

名目は山東省にいる日本人居留民保護、真の目的は北洋軍閥、張作霖（北京政府の大元帥となっていた）を援護するためでした。済南で北伐途上にある蒋介石軍の進行を阻害します。中国からは厳しい抗議がなされましたが「第二次山東出兵」へとつながります。

この年の10月に毛沢東が江西省井冈山に革命根拠地を樹立した。共産主義の思想は徐々に浸透しつつありました。

日本の一貫した戦略は「反共和制」です。中国革命軍（蒋介石・共和制）が満蒙一帯を含めて統一したら、日本は満蒙における特殊権益を回収される。又、中国共産党が活発化し満蒙に影響を与えられるのはこまる。共産主義は打倒皇帝を主張していますから日本の天皇制を否定していました。

この頃から中国には日本にとって好ましくない二つの大きな影響力が広まっていました。

1928年2月蒋介石は打倒張作霖を目指して第二次北伐の攻撃を開始し、すかさず日本は4月に第二次山東出兵を開始し前年に続いて再び済南で交戦します。前年は引き下がった蒋介石軍は今度は本気で交戦したため、市街戦となり済南の市民5000人以上の死傷者がでるといふ悲惨な事件となりました（済南事件と呼ばれている）

(14)北伐の成功と満州某大事件

蒋介石の優れた作戦と軍略によって北京に向かい張作霖を攻撃しました。

遂に6月3日張作霖は北京を離れ奉天に向かって逃げ出します。すると、翌日4日奉天駅に着く前に**関東軍は張作霖の乗っていた列車を爆破し謀殺しました。**

この爆殺計画は田中義一内閣によって決められていました。

「北京から逃げる張作霖を生かすか殺すか、色々の意見があった。田中首相は、かねてから懸案だった満蒙5鉄道問題を解決に張作霖を利用するために、張作霖を生かしておく主張したが、関東軍は、「この際、邪魔者は消せ」と主張し関東軍に

処置が任された。関東軍は自分たちの謀略の手がかりを一切消し、国民革命軍のゲリラの仕業と偽装した」（山中 恒著 アジア・太平洋戦争（上）p145）

関東軍の読みはこの「某大事件」によって息子の張学良が反撃をしてくると考えていましたが、張学良はその謀略には乗ってこなかった為、戦争は避けることが出来ました。関東軍はここで一気に戦闘状態に持ち込み満蒙を占拠することでした。

(15)南京に国民政府が誕生

7月22日張学良は「本日より三民主義を遵守し国民政府に服従する」と発表し、張学良の合流によって中華民国の統一が完成することになりました。

10月10日、蒋介石は中国国民党の国民政府主席就任式を挙行し、首都を南京と正式に決め、孫文の遺囑を守り三民主義に基づいて共和政治を行うことを宣誓しました。ここに広義の辛亥革命が終了することになります。

アメリカを先頭に欧州列国も南京の国民政府を中国統一国家として承認しました。1929年6月3日蒋介石は北京に安置されていた国父孫文の棺を南京に移して記念祭を執り行いました。然し、この時点でも日本は承認をしていませんでした。日本の主張は関税自主権の承認と交換に、西原借款を関税収入を担保にして返済するように強く迫りました。西原借款とは寺内正毅内閣が国民革命（蒋介石）を弾圧するための政治工作資金として段祺瑞に貸した資金です。中国の近代化を最後まで妨害して反省のないまま国際的な圧力を感じて6月3日日本も渋々正式に承認しました。（このような厚顔無恥な国家である近代史は教えられませんー私見）

あとがき

日本の近代史の中でも難解なのが1911年から1930年迄だと私は考えていました。それを克服するために日本史の主眼である国内の政治・経済を捨象して、中国との関係で本稿を纏めました。世界史を理解するためには蒋介石は鍵になる人物です。蒋介石は孫文の「三民主義」に心酔して接近してくるソ連共産主義との違いに気づきます。自己中心的な「対華21ヶ条」は自らの墓穴を掘ったに等しい愚行であることが解ります。日本の国内情勢を見れば明らかなです。孫文の三民主義と五権憲法も記したかったのですが時間切れとなりました。

張作霖について追補しあとがきとします。

(山中 恒著・アジア太平洋戦争史(上) から得た文脈を編集して記載します)

張作霖は始は奉天省の軍閥にすぎなかったが、袁世凱が張作霖を奉天省の最高統治者に据えたことが契機となって東北三省を手中に収める大軍閥になった。やがては袁世凱にならって北京に自分の政府を樹立しようと野望を抱くようになった。日本は1916年6月袁世凱が死亡したとき「満蒙の実権を握る張作霖を援助することで、満蒙における日本の特殊の地位を確実にする」と表明して支援した。1918年2月張作霖は満州を制圧し北京に進出、1920年以降、更に日本の支援のもとに権勢を張り、私腹を肥やして自分の軍隊を増強し、東北三省から熱河省、**綏遠省**、**察哈爾省**まで支配するよう大軍閥になった。(地図参照)

辛亥革命後中華民国が成立しても、日本は満州を属領扱い続け、満鉄を通じて巨額の投資をした。それを可能にしたのは満蒙に割拠して権勢を張り、強力な軍隊を保持する北洋軍閥の大物、張作霖の存在であった。

然し、1925年頃から日本側の要求を拒絶したり、無視するようになった。

1926年12月、張作霖は山海関を超え翌年6月北京に「安国軍政府」を組織し、自ら「中華民国陸海軍大元帥」を名乗り北洋軍閥政府のトップの座につき、日本に支配されるのを好まず、英米と接近を図るようになった。

地図は加藤陽子著、「それでも日本は戦争を選んだ」 p320から引用



その権勢は中国統一にも大きな障害であった。蒋介石も日本軍と結託した張作霖を討伐しないかぎり中国は統一が出来ないと考え二度の「北伐」を挙行した。日本軍は「山東出兵」でそれを妨害したことは本文に記したとおりです。

満州での目論見は日本が始に期待したような成果は挙がらなかったと言えます。むしろ日本の金融政策の欠陥について、自らの紙幣「奉天票」の発行とその強制使用で大豆の先物取引等を通して莫大な利益を得ていたのは張作霖であって、日本の思うままに動かし、張作霖を通じて利権を獲得し、満鉄を通じて植民地化を進め、満蒙を中国から分離して植民地化し、日本の属地にして朝鮮半島と一体化する日本側の目論見に陰が見え始めてきました。

1928年蒋介石による2回目の北伐が成功しそうになったとき、田中義一内閣は北京から逃げ出す張作霖をどう取り扱うか生かすか殺すかを検討していた。結論は本文に記した通りとなった。

ふりかえり

日本は日清戦争で台湾を植民地にしました。山東半島の権益は三国干渉によって返還させられました。

日露戦争で関東州の租借権（遼東半島の先端にある旅順・大連付近）と旅順から長春までの鉄道の経営権でした。その期間は1923年迄です。

1910年に朝鮮併合をして韓国を植民地化します。

第一次世界大戦後ワシントン会議で「山東協定」により山東省の権益を還付しましたから国際連盟から委任統治をうけたのは9頁の地図にある南洋諸島（グアムを除く）です。過激な対華21ヶ条要求を突きつけましたが結局認められたのは関東州の租借権と南満州鉄道の経営権の期間延長のみでした。

明治時代からの富国強兵には朝鮮のみならず満州をも日本の利益線後には生命線と主張して満州支配を標的にしていたことはロシアとの南北満州境界線の秘密協定からも明らかです。日本にはいつも燃えさかる力がみなぎっていますがその力、エネルギーを用いる方向が「強兵」に傾き「富国」が犠牲にされていく歴史をたどっています。本稿では国内情勢を割愛してありますが政争と財政危機は解消されことなく社会は思想統制等で個人の心まで支配し続け、情報は開示せず、秘密主義で国民を支配して1945年の敗戦を迎えます。その同じような道が形を変えて用意されています。歴史から目をそらさない賢明な国民のみが政府の横暴にストップをかけることができます。歴史を学ぶ意義は深いです。